

◎「流通ビッグデータ利活用のためのデータマイニング技術の振興」が評価

矢田勝俊教授が文部科学大臣表彰を受賞

平成31年度 科学技術分野の文部科学大臣表彰 表彰式



商学部の矢田勝俊教授が、平成31年度科学技術分野の文部科学大臣表彰【科学技術賞(科学技術振興部門)】を受賞し、4月17日、文部科学省において表彰式が行われた。

文部科学省では、日本の科学技術水準の向上に寄与することを目的とする科学技術分野の文部科学大臣表彰を定めており、科学技術賞は顕著な成果を収めた者に対し、表彰を行うものである。

今般の科学技術賞受賞者は88件180人で、そのうち私立大学関係者はわずか20人。関西大学としては延べ12人目の受賞となった。矢田教授は、大規模データの蓄積・管理・分析の低コスト化を実現するなど、マーケティングにおけるデータマイニング技術の有効活用法を提示。これにより、流通業におけるビッグデータ利活用の礎が築かれ、データマイニング技術の振興に貢献したことが、今回の受賞につながった。

データマイニングとは「データからの知識発掘」のこと。新たな知識、未知の結果を発見するためには、大量の情報の中からパターンやルール、相関を発見し、知識ベースとして蓄積・学習することが求められる。これまで流通業界では、効率的なデータ処理のためのインフラが必要とされる一方で、データマイニング技術導入には多くの問題が残っていた。そうした中、矢田教授は国内の大規模データの前処理システムとして多様なデータを統合し、蓄積・管理・前処理を低コストかつ高効率で実現するプラットフォーム「MUSASHI」を公開。また、大規模データ分析のためのASPシステムやマーケティングアプリケーションの開発など、データマイニング技術のビジネス応用について研究を深め、さまざまな国際ジャーナルや多くの学会誌で発表してきた。最近では、従来未開とされてきた店舗内の購買プロセス、すなわち消費者行動の研究においてこの手法を取り入れ、満足できる売り場づくりを創出するための挑戦を続けている。

現在、データマイニング技術は小売業をはじめとする多くの企業に導入され、大規模な研究会も定期的開催されている。矢田教授は式典で、「これからも研鑽を重ね、研究を進めてまいります」と、今後の研究発展に向けてさらなる意欲を示した。



RFIDなどを用いた行動履歴データと購買データを組み合わせることで、顧客がどのような経路をどのように歩き、何を購入したかがデータ化され、売場作りのヒントが得られる。



● 商学部 矢田勝俊教授



▲ 研究について説明を行う矢田教授(中央)

Data Mining

◎ 総合情報学部 創設25周年記念式典開催

25年の歴史を振り返り、さらなる飛躍を

4月28日、総合情報学部創設25周年記念式典が高槻キャンパスで開催された。総合情報学部は、1994年に文理総合をコンセプトとした画期的な学部として創設され、緑豊かな自然の下、最新の情報機器と最高水準のスタジオ設備を擁する高槻キャンパスにおいて授業を開始した。2013年には情報演習棟が完成。アクティブ・ラーニング教室やレーザーカッター、3Dプリンターを備えるMonoLabを新設するなど、その教育・研究環境は常に時代の先端を走ってきた。

総合情報学部らしく映像を用いた式典では、芝井敬司学長、池内啓三理事長から祝辞が述べられ、歴史へ思いを馳せるとともに、未来へ向けてさらなる発展を願った。また、総合情報学部創設時から給付奨学金として支援を続けている株式会社オービックに感謝状が贈呈された。

その後の大同窓会では、社会で活躍する卒業生が日交を温めた。子供を遊ばせながら参加できるよう、プログラミング教室やサッカー教室、アイススケート教室などの企画も用意され、在学生、卒業生、教職員が一体となり、25周年の節目を盛大に祝った。



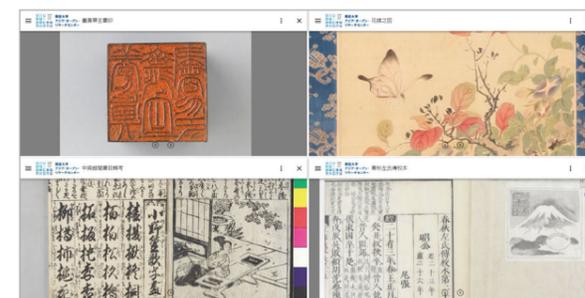
▲ 桑原尚史総合情報学部長の挨拶



▲ プログラミング教室

◎ 世界最高水準の東アジア文化研究拠点による研究資産をオープン化

KU-ORCASによる「関西大学デジタルアーカイブ」構築



▲ Mirador等のビューワーを使用することで、複数の画像の閲覧やアノテーションの追加、資料情報等の確認が可能

関西大学アジア・オープン・リサーチセンター(KU-ORCAS)が、Web上で公開される画像データを広く共有するための国際的な枠組み「IIIF(トリプルアイエフ)」に対応したシステム「関西大学デジタルアーカイブ」を公開した。

「関西大学デジタルアーカイブ」では、関西大学の知的ルーツの1つとされる泊園書院の貴重な資料群「泊園文庫」「泊園印章」や絵画コレクション「大坂(阪)画壇」を、「IIIF」に対応して公開。同アーカイブ内において、総合図書館が所蔵する和書や漢籍等の幅広い

資料の提供も開始した。これにより、世界中から鮮明な画像を容易に閲覧できるだけでなく、他機関が提供する画像と並べて比較したり、コメントやタグをつけて共有したりすることが可能となった。

KU-ORCASは2017年の設立以来、東アジア文化研究に関するデジタルアーカイブの構築や、社会に開かれたオープン・プラットフォームの形成を推進してきた。今後も「関西大学デジタルアーカイブ」におけるコンテンツの充実を図りながら、その活用法に関わる研究ノウハウをオープン化するなど、世界最高水準の東アジア文化研究拠点としてさらなる発展を目指す。

また、3月27日にはKU-ORCASによる国際シンポジウム「デジタルアーカイブと東アジア文化研究—現状と課題—」が千里山キャンパスにて開催され、韓国、ドイツ、アメリカ、日本の研究者らが研究成果等を発表した。



▲ 国際シンポジウム「デジタルアーカイブと東アジア文化研究—現状と課題—」の様子

関西大学デジタルアーカイブ <https://www.iif.ku-orcas.kansai-u.ac.jp/>